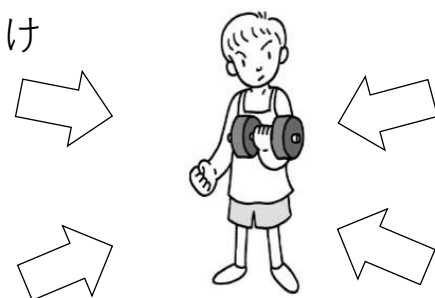


# 子どもたちはもっと輝く！

## アンテナを張った教師に！

「教師の専門性」が厳しく問われる時代になりました。時代の流れとともに教育の中心的課題は常に変化します。「専門性」そのものは永遠の課題ですが、子どもと向き合える先生には、比較的短い歳月でなれそうです。

大事なことは日常の学校生活の中で、どれだけスムーズにいろいろなことを吸収できるかにかかっています。中でも一番大事なものは、子どもからの情報をキャッチすることです。



子どもとは毎日のように接するわけですから、子どもからたくさん情報を得ることで、私たちは自動的に、そして飛躍的に成長することができます。





# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 2

## 子どもへのことばかけ（子どもを尊敬しているか）

私たちの目の前にいる子どもたちは知的障害のある子どもたちです。私たちが簡単にやっていることでも、子どもたちは実はものすごいエネルギーを使って、成し遂げているのです。例えば、私たちは簡単な計算なら無意識に自動化して処理しますが、大きな単位の計算はきっと頭の中に数字を思い浮かべ、苦勞して計算するのではないのでしょうか。それとおなじことが子どもたちの頭の中で日々行われているとしたら、決して「こんなこともわからないのか」……とは言えないと思います。

2たす3は  
.....



=



27659+34612=  
.....

子どもへの呼びかけ一つ、見守りのような気持ちで子どもに向き合っているのか、その姿勢がわかります。

### ことばかけ5か条

- ・具体的に
- ・簡潔に
- ・短く
- ・肯定文で
- ・できることを（やさしく）伝えましょう。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

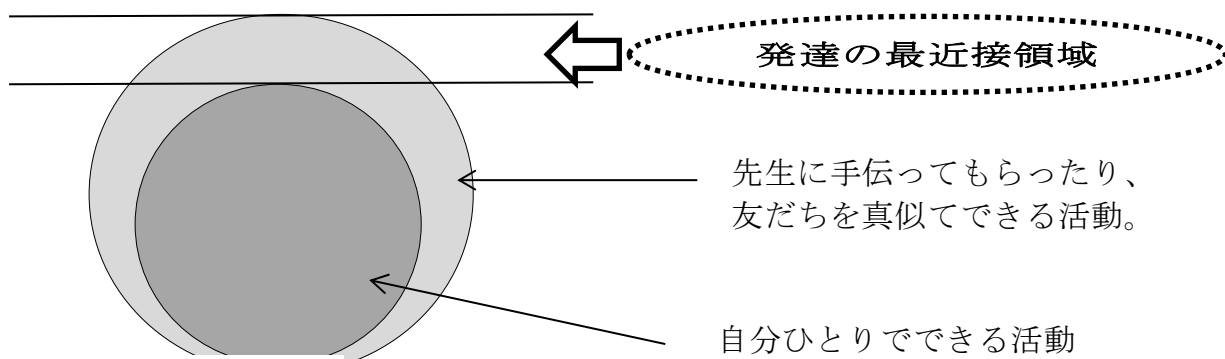
No. 3

## 「できそうでできない場面での葛藤こそ

### 発達のエネルギー」 「発達の扉（上）」：白石正久著 かもがわ出版より

私たちは使命感に燃え、「子どもたちのできることを増やしたい！」と、常に思っています。が、「できないこと」や「わからないこと」を繰り返し伝えるだけでは、教育効果は薄く、「できないこと」を繰り返すことで逆に劣等感を覚え、自信をなくしてしまうこともあるのです。

一番いいのは「できそうでできない」ような課題設定をすることです。



#### <指導の基本>

- ①「できること」にしっかり取り組むことで、失敗ばかりで自信が持てない子どもたちが自信を持てるようになる。
- ②「成功体験」の蓄積により、子どもたちの「もっとやりたい」という気持ちが高まる。
- ③子どもたちの活動が自主的に広がり、いろいろなことへの挑戦が始まる。
- ④広がると「できそうでできない場面」が出てくる。
- ⑤その場面での葛藤が「発達」のエネルギーとなる。
- ⑥ここで良き理解者の援助や集団の力を借りると乗り越えることができる。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

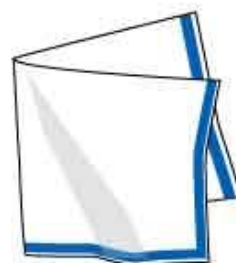
センター室だより

No. 4

## ハンカチ もってますか？

小学部から上がってきた生徒は、通学服のポケットか、かばんにいつもハンカチを入れています。校内服に着替えた時、校内服のポケットにハンカチを移し替える指導をお願いします。毎日きれいなハンカチが通学服のポケットに入ったままではハンカチが泣くというものです。

日常生活の指導は、身近なところで課題がたくさんあります。私たちはふだん、無意識にできているのですが、子どもたちを観察すると、日常生活で困っていることは多く、逆に言えばそ



ういう部分での伸びしろは まだまだあるということです（特に地域から新たに入学してきた子など）。

こういうところをていねいに指導すると、子どもたちも「先生すごい！」とってくれるます。子どもと良い関係ができるはじめての一步ですよ。

# 子どもたちはもっと輝く！

## チームティーチング①

私たちはだいたい複数で力を合わせ、授業をしています。主担の人が前で話している時、サブの教員はどうしていますか？

後ろで立って見つめられると主担はけっこうやりにくいものです。



子どもが話を聞くときは基本、子どもの目線と平行です。同じ目線で授業の補助に入ると、生徒の考えや必要な支援が一段とわかりやすくなります。

あれこれ一度にはできません

が 下記を参考に！ サブTとして気をつけたいこと

### サブ教員の役割

- ・メインTと児童の架け橋。個々の児童への支援をしつつ、授業全体への良き応援団になる。

### 動きは少なく

- ・児童生徒が着席して話を聞くときは、それと同じ姿勢をとる。目立たない姿勢で。
- ・メインTの話が終わるまでできるだけ動かない。
- ・授業から外れていく児童生徒についていくときも、静かにそっと退出する。

### 距離の取り方

- ・支援を多く必要とするときは近くに、支援が不要なときは、離れておく。

### やり方を教える

- ・「できないから児童生徒の手を持って全てをさせる」のはNG＝できない課題は設定しない。
- ・身辺自立の課題では、できることは最後までやりとげさせる。

# 子どもたちはもっと輝く！

## 「チームティーチング」②

ある支援学校の公開授業を見ました。音楽の授業で、主担の先生の「文化を大切にした指導観」もすごかったのですが、その授業に入っているサブの先生の動きに、本当に目を見張りました。ある先生は子どもの近くでリズム感・躍動感にあふれボンゴを叩き「生きた教材」に成りきり、また、ある先生は子どもと同化し、誘うようなパフォーマンスで安心して参加できる雰囲気を作っていました。

どんなにいい教材でも、全ての子どもの学習ニーズに答えるには限界があります。「教材」と子どもの間を埋めるのが、チームとしての教師です。



別の機会に別の学校の体育の授業を見ました。ここでは「ボールカゴ鬼ごっこ」という楽しそうな教材を扱っていましたが、サブの先生は、比較的重度の子どもの近くで腕を組んで見つめているだけでした。多分、なるべく自分の力でできることを優先した結果、そのような関わり方になったのでしょう。

やはり、授業はチームで創るものです。時間がなくて授業の打ち合わせどころか、授業準備まで手が回らない現状を憂いつつ、サブとして、どう、児童生徒の力を引き出せるのか考えたいです。





子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 7

## 連絡帳 どう書こう？

毎日の連絡帳、時間のない中、みなさん苦労されていると思います。また、「どんなこと書いたらいいのか悩む～」という人も多いのではないのでしょうか。

一番好ましくないのは「1時間目は〇〇をしました。2時間目は△△しました……」これだけなら、週の予定表で保護者はすでに知っています。少しでも「何に興味を持ち、どのように取り組んだか」書きたいものです。

ネタのないときは、授業の様子だけでなく、日常のちょっとできていることや友だちとの関わり、遊びの様子 etc

これなら書けそうです。そして、別の話題に変わるときは「大胆に行間をあける！」これなら読みやすくなるし、スペースも稼げます。



pixta.jp - 741843

では今日もがんばって連絡帳を書きましょう！



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

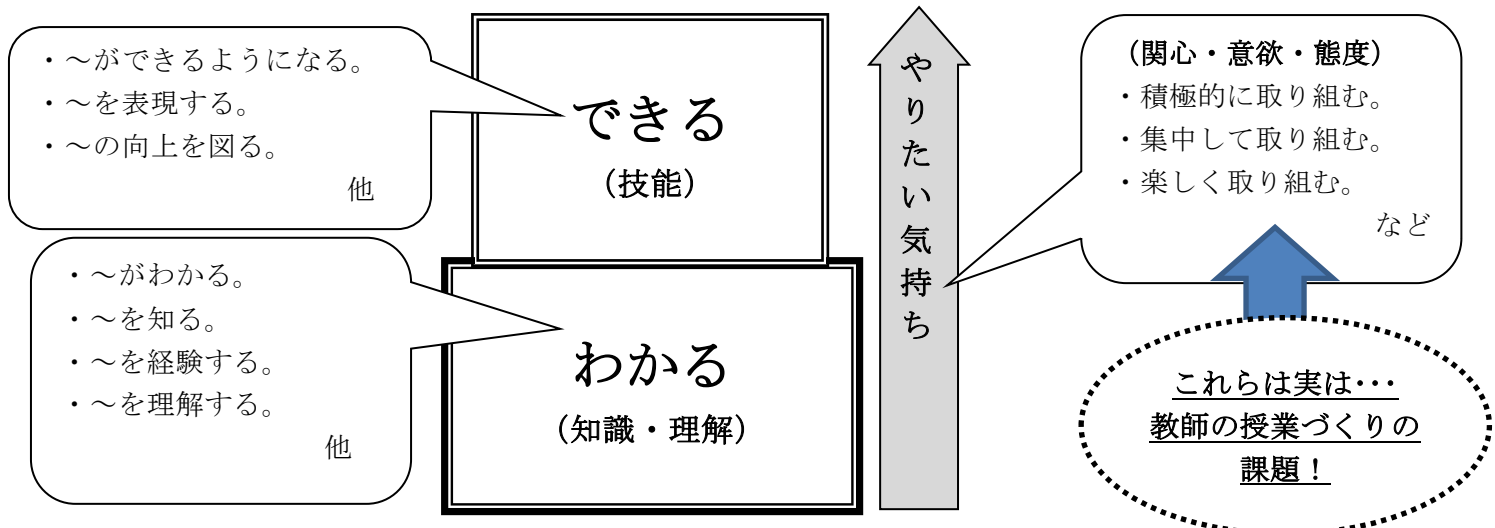
No. 8

## 「わかる・できる」(学習目標)

例えば、足の不自由な方の「移動」を支援するためには「車イス」などといった便利な補助具があります。では、知的障害の子どもたちは基本的に何を支援するのでしょうか。 それは……

知的に障害がある ⇒ 「わかる」ことを支援する

にほかなりません。そしてやることがわかれば「できる！」こともいっぱいあります。今、みなさんは、年間計画を作成したり、学習の記録をつけはじめたりしているのではないのでしょうか。学習目標は「～がわかるようになる」「～ができるようになる」といった表現で授業を考えると、内容・方法もイメージしやすくなります。







# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 9

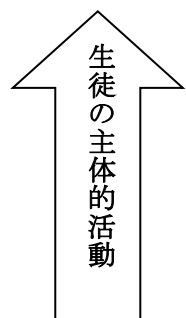
## 支援の手だて

「学習目標」「学習内容」に続いて「支援の手だて」という項目がありますが、どう書いたらいいか時々悩みます。基本的考えとして、「子どもたちが何とか自分でできるよう、サポートする」と考えてください。ですので、主語は基本「教師」です。

次にサポートの中身です。実はみなさん、けっこう日常生活の中でさりげなく支援しています。「ことばがけをして活動を促す」だけでも立派な支援の手だてになります。

一つだけ気をつけて欲しいこと。それは、「～させる」という表現は、「教師の強制」色が強く、生徒の主体的活動を支援する表現としてふさわしくないということです。「～を促す」あるいは、文章の順番を変え、支援の内容が具体的になるようにしましょう。

----- 課題の到達点



(Ex) 「絵カードで理解させる」(よくない例)

⇒「わかりやすくなるよう、絵カードを使用する」

支援

教員による支援、用具の工夫、環境を整えるなど



子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 1 0

## 「集中する」という学習目標

先生方が過去に評価した文章「学習の記録」を見ていると、学習目標に「集中して取り組む」という表記が多数あります。たしかに集中の難しい児童・生徒はたくさんいるし、課題としてははずせません。ただし、それ自体を学習目標にする、ということには、私は抵抗があります。理由は二つあります。

まず一つ目は、端的に教員が準備した授業が子どもの興味・関心をひき、わかりやすく、子どもの課題に応じたものになっているか。ということです。子どもの目標ではなく、教員の授業づくりの一つの指標が「子どもが集中するかどうか」なのです。

もう一つは、各教科や教育内容には「教えたい中身」があります。決して集中そのものを教えるのではなく、その活動を選んだ理由には先生たちが「教えたい」と思う中身があったはずです。

もし「集中する」ということにアプローチするならば、まず、

① 本人がやり遂げることができる課題を設定すること。

② 本人の状況に応じ集中する時間を設定すること。

といったことを意識するといいかもかもしれません。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 1 1

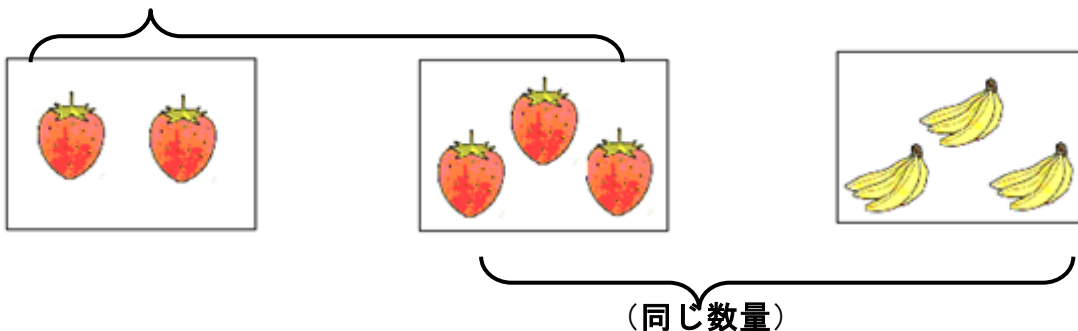
## 「かず」の指導 <基礎編>

昔、子どもたちにどのように「かず」を教えるか大変悩みました。  
(いえ、今でも悩んでいます！) 何が「1」で何が「2」なのか、  
抽象的思考が苦手な子どもたちには手掛かりがないのです。つまり

「子どもたちは、自分で気づかないとわからない」  
ということなのです。

だから「かずの概念」や「数量の指導」には、子どもが自ら気づく  
仕組みが必要です。例えば、この3枚のカード。

(同じイチゴ)



これらを使って、「同じものの集め」の学習をする中で、「どこが同じ？どこが違う？」といったやり取りをするだけで、だいぶ気づきが増えてきます（実際の授業ではこのようなカードをたくさん作り、同じものを見比べて探すことで習熟を深めます）。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 1 2

## 「ことば」の指導 <基礎編>

昔、ある体育の授業（小学校1年生）の実践報告を聞いていた時のこと、子どもの感想文がびっくりするほどよく書けていて、「どうしたらこんなにしっかり感想がかけるようになるか」と聞いたら、

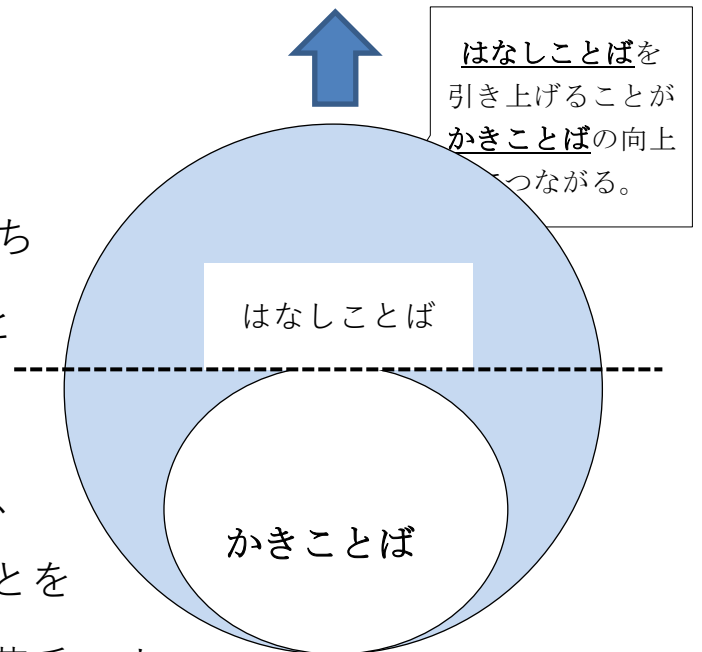
「特に書かせる指導はしていないが、発表する機会や、対話の時間はたっぷりとっている」

ということでした。

「かきことば」は普段子どもたちが普通にしゃべっていることをいちいち「文字」に置き換えて再構成しないと  
いけません。

それだけでもかなり難しいですが、本校の子どもたちは、日常感じることを「会話」で表現することそのものも苦手です。

指導の最初に必要なことは、子どもたちの内面に、誰かに伝えたいこと、表現したいこと（はなしことば）をいっぱい育てること  
なのです。 そう考えると、授業内容も膨らみますね。





# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 1 3

## 自閉症（自閉症スペクトラム障害）

以前、「サーカスのライオン」という人形劇が校内の鑑賞会で上演されました。（ライオンは子どもを助けるため、火事に巻き込まれてます。）

帰りの会で子どもたちに何気なく「ライオンはどうなりましたか」と聞いてみました。ことばの交わせる子6人の答えは以下の通りです。どんな子が推測してください。

Fくんの「こげちゃった」が笑える回答ですが、A B C Fの4人は

Aくん「最後は火の輪くぐりをした」

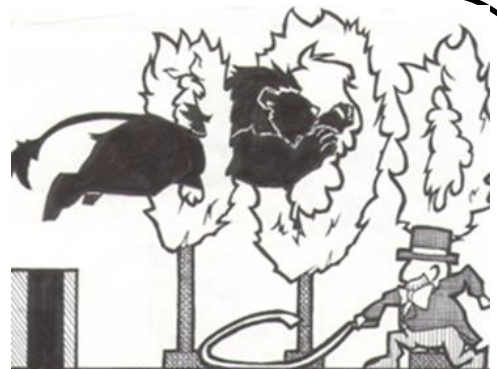
Bさん「火の輪とんだ」

Cくん「ショーに出た」

Dくん「わかりません」

Eさん「え、ライオン死んだんちゃうの？」

Fくん「ライオンはこげちゃった」



ラストシーン  
イメージ図

自閉症、Dくんはダウン症、Eさんは知的障害(Bグループ位)でした。

なぜ、このような差が生まれたのでしょうか。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 1 4

## 自閉症（自閉症スペクトラム障害）②

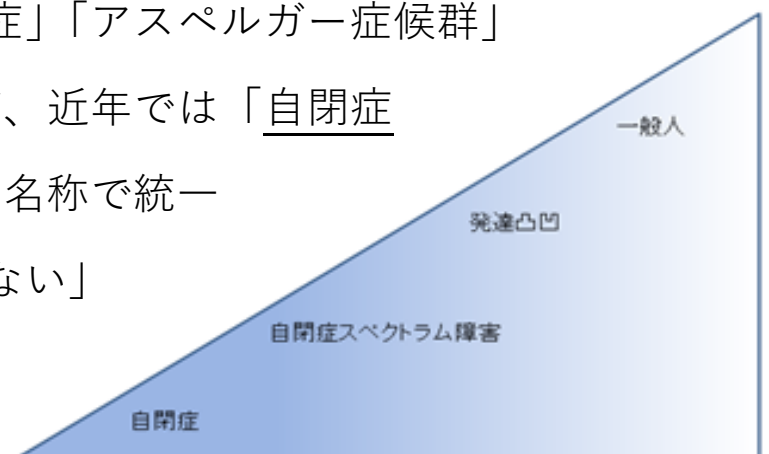
黒いシルエットで輪くぐりをしているシーンはいろいろなことを連想させます。ところが自閉症の子どもたちはこの「想像する」ことが大の苦手です。だから黒いシルエットだろうがなんだろうが、輪くぐりをしていれば「ライオンは生きている」と考えます。「こげちゃった」も珍解答ですが、「黒い＝焦げた」と非常に視覚優位です。

自閉症の子どもたちは、「三つ組み」と言うつまずきがあります。

- 1.対人関係の形成が難しい「社会性の障害」
- 2.ことばの発達に遅れがある「言語コミュニケーションの障害」
- 3.想像力や柔軟性が乏しく、変化を嫌う「想像力の障害」

※最新の診断基準（DSM-5）では、1と3に集約されています。（by 清水）

昔は「(カーナー型) 自閉症」「アスペルガー症候群」など区別されていましたが、近年では「自閉症スペクトラム障害」という名称で統一され、「健常児との境目はない」(連続体＝スペクトラム)と解釈されています。





# 子どもたちはもっと輝く！

「生きる力」に  
満ち溢れる！

## ダウン症の子どもたち

ダウン症候群は別名 21 トリソミーと言われ、染色体異常で発症する障害です。近年、「新出生前検診」（簡単な検査でダウン症などの診断ができる技術）が開発され、安易な中絶を勧める危険性や障害のある可能性のある胎児の命が問題とされていることも知っておいてください。

さて、ダウン症の特徴として、知的障害と特異的顔貌に加え、心疾患、低身長、肥満、筋力の弱さ、頸椎の不安定性などを合併することがありますが、何ととっても彼らの特徴は次のような性格や行動の妙な一致です。

- 陽気な性格でありながら、気分屋で頑固な時がある。
- 表現が豊かで、リズムやダンスですごいパフォーマンスを示す。  
(集会で自由にダンスをしていて、ふと気がつくと舞台の上へ上がっているのはほとんどがダウン症の子だったりする。)

したい、という気持ちが強いのでしょう。だから、急に自分の行動にストップをかけるのが難しいのです(「車は急に止まれない」と同じ)。そう思って彼らの長所に向き合うと、指導しやすいです。

時もあります。



子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 1 6

## 第4の障害・子どもの虐待

今回は「発達障害の子どもたち」（杉山登志郎：講談社現代新書）から引用です。「発達障害」について、これほどわかりやすく具体的に書いてある本はありません！（障害児教育に関わる人必携です。）

その中で杉山さんは「発達障害」を4グループに分けています。一つ目は知的障害児のグループ、二つ目は自閉症スペクトラム障害、三つ目は注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）、発達性協調運動障害（極度の運動音痴）。そして、「子ども虐待」による発達の遅れを「第4の障害」と位置づけています。

虐待やネグレクトは単なる「育ちそびれ」にとどまらず、「発達」そのものが質的に変わってしまうそうです。そして、幼少期に思考の土台となるべき愛着が育まれなかった子どもたちは、正常な思考や感情のコントロールがとても難しく、正論の指導だけでは対応できないのです。

そのような子どもたちを指導するときは、「愛着」という原点に育ちそびれを抱えていることをしっかり意識して、向き合いたいものです。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 17

## 教師の専門性①(子どもとの対話)

「何をもって教師の専門性」と言うのか、実際難しいところです。「障害についての知識が豊富」とか「授業のネタをたくさん知っている」ということも重要かもしれませんが、そういうものは時代の流れで絶えず新しいものに変化します。そういった点では、教師は常に進化しなければならない職業なのです。

でも、普遍的なこともあります。私見ですが……



### **子どもとしっかり対話ができる**

ことが大事なポイントの一つではないかと思っています。「対話」ですから一方通行ではありません。

まず、自分の伝えたいことが「わかりやすく相手に伝わる」ことが必要です。さらに相手の反応をしっかり受け止めたり、引き出したりしなければなりません。

ベテランの先生を見ていると、ことばのない子どもと向き合っているでも、必ず子どもの行動に意味を見出し「○○くん、こんなこと言ってる」と代弁することができます。

そして、ことばが返ってこなくても、ていねいに

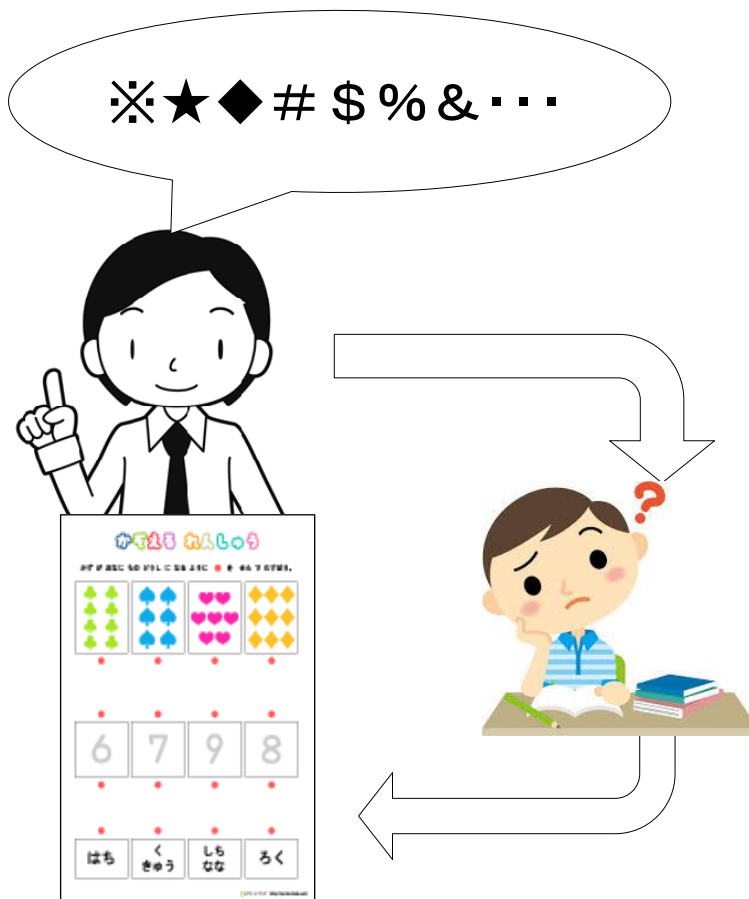
「ことばがけ」をしています。みなさん、どうですか？



# 子どもたちはもっと輝く！

## 教師の専門性②(子どもへの気づき)

教師が課題を提示（あるいは発問、指示）して、子どもが課題を解決するまでには実に多くの関門が存在します



- ・教師の説明が難しい
- ・教材解釈の不足
- ・具体物がないからわからない
- ・情報量が多すぎる
- ・視知覚につまずき
- ・記憶がよわい

- ・答えの書き方がわからない
- ・いつ答え始めたらいいかわからない

どこで子どもたちがつまずいているのか

私たちはていねいに見ていく必要があります、子ども自身のつまずきは障害の影響もありすぐには変化しにくいので、課題のわからせ方、答えの引き出し方に合理的配慮と基礎的環境整備が必要です。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 19

## 教師の専門性③(障害のとらえ方)

### 「発達は回り道をする」



人は、学習や経験によって得た知識や理解を生かして自分の行動を変え、成長していくことができます。

その方法は一通りではありません。特に障害のある子どもたちは回り道をしながらいろいろなことを獲得していきます。大事なことは「障害があるから発達しない」のではなく、回り道をして「異なる発達をする」ということです。

障害

### 障害にはプラスの側面もある

そして、「障害」はどうしても「マイナスイメージ」になりがちですが、実は「障害」があることで成長のエネルギーを凝縮させ、一気に爆発させるという「プラスの側面」もあります。

例えば、四肢欠損の方の水泳をみると、体幹だけで泳いでいます。その方の体幹の使い方は私たちをはるかに越えています。そのような視点で子どもたちをプラス思考で見つめていきたいものです。





# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 20

## 教師の専門性④(子どもへの思い)

毎年行われている校友会主催の「成人式」では、懐かしい教え子たちの成長した姿を見ることができます。どの生徒さんも、見違えるようにたくましさにあふれ、「社会の一員」として地に足をつけて生きていることを感じさせてくれます。

「社会の一員」とはどういうことでしょうか。それは

**「個人としての尊厳」をもち、  
「個人として大切にされている」**

ことにほかなりません。



どの子にも、「学びたい」「成長したい」という欲求と権利があります。しかしながら、われわれはそれらを見落としてしまったり、多忙さに負けて、追求できなかったり、「集団で過ごすための義務」を押しついたりしていないでしょうか。学校教育の段階で、この「個人として大切にする」が、どれだけ保障されているのか見つめなおしたいものです。





# 子どもたちはもっと輝く!



大阪府立佐野支援学校

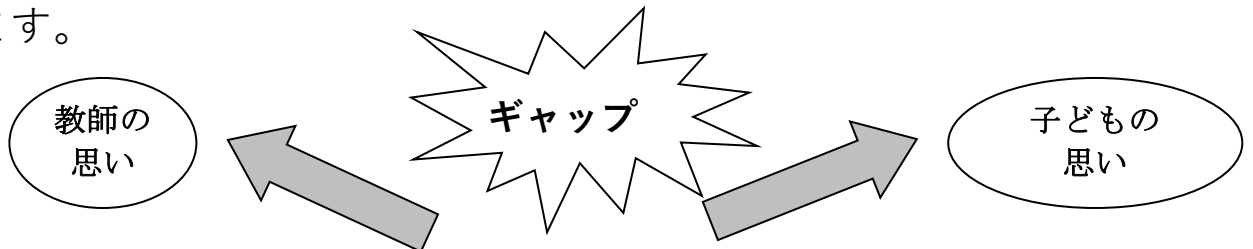
センター室だより

No. 2 1

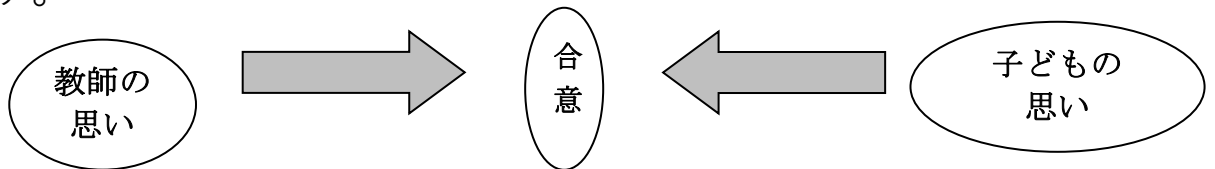
## 折り合いをつける

(障害児教育の大切な指導法)

「教師の指導したいこと」と「子どもの思い」には時としてズレが生じます。



そんな時、子どもたちが「どこまでならがんばれるのか」考えて欲しいです。



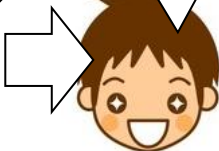
子どもは納得すれば主体的に動きます。そして少しずつ合意ラインを高めていくことができます。

<事例：牛乳の嫌いな生徒の指導>



ここまででいいから飲んでみよう。

と線をつける。



ここまでなら、がんばってみようかなあ

と前向きに



こら！  
飲まんかい

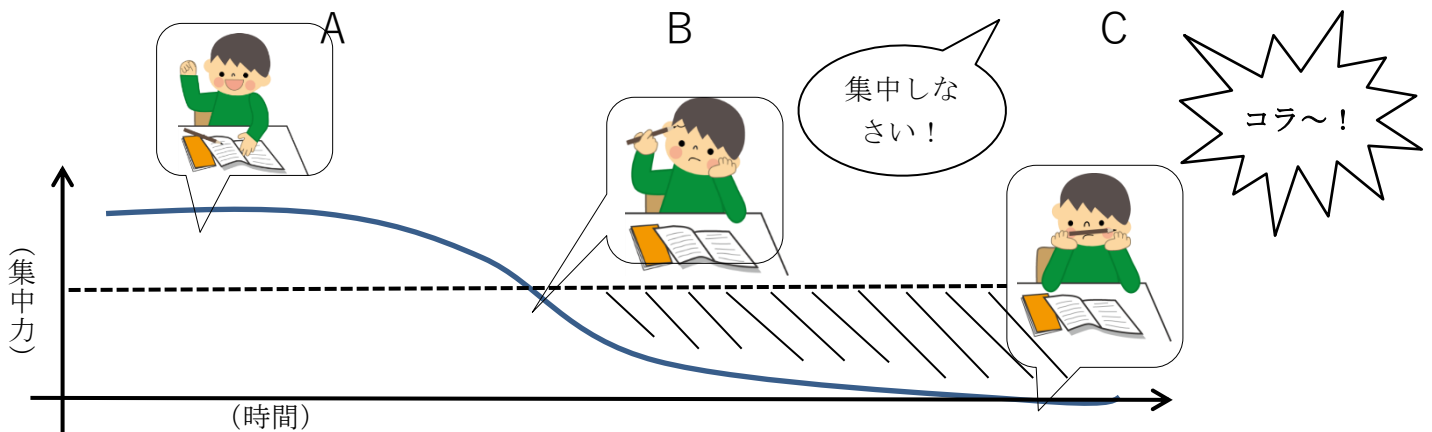
では……



# 子どもたちはもっと輝く！

## 「ほめて伸ばす」とは

「ほめて伸ばす」とは決しておべんちゃらでほめることではありません。私たちは、子どもが集中していなかったり、何か問題行動を起こしたときに注意することが多いです（BやCの状態の時）。



Aの状態の時はどうでしょう。「やって当たり前」と思って、あまり声をかけないことの方が多いのではないのでしょうか。ここで発想の転換が大切です。昔、ある子に言われました。「先生は僕ががんばっているときはいつもほめてくれへんけど、ちょっとしたことで注意ばかりする」

Aの状態を保つために子どもたちが膨大なエネルギーを費やしているとしたら……。そう考えると、Aの状態、無視できませんね。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 2 3

## 「ほめる」から「励ます」へ

「ほめて伸ばす」について紹介しましたが、その指導も絶対的ではありません。

まず、「親が子をほめる」「教師が生徒をほめる」というように、「ほめる」こと自体が上から目線で縦の関係になりがちです。また、例えば、掃除の時「先生にほめてもらうために掃除をする」では、あまり意味がありません。



ですので、子どもをほめるときには「〇〇が、できていたね」等、具体的に達成した内容を挙げることが重要です。それにより、子どもたちは、自分の行動のどこが良かったのか意識し、強化することができます。(ただ、私たちは知的障害の支援学校で勤務していますので、説明の仕方も、具体的に、簡潔に伝えていく必要があります)

そのような縦の関係を越えていく言葉かけを、アドラーという心理学者は「励ます」という表現をしています。





子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 24

## 「<sup>ほうび</sup>ご褒美」の教育効果は？

「ほめる」、「励ます」、ときたところで次は「<sup>ほうび</sup>ご褒美」です。

「がんばったシール」など、私たちはよく「<sup>ほうび</sup>ご褒美」を用意します。決して、子どもを物でつっているわけではありませんが、一部には「<sup>ほうび</sup>ご褒美なかったら子どもの意欲はでないのでは？」という心配もあります。



実はこの「<sup>ほうび</sup>ご褒美」、教育効果があります。すぐに得られる<sup>ほうび</sup>ご褒美を設定することは「今勉強すること」の利益や満足を高めることにつながるそうです。

ただし、いつ、どのような形で渡すのがいいかは検証が必要です。例えば「テストでいい点とったら<sup>ほうび</sup>ご褒美」と「本を読んだら<sup>ほうび</sup>ご褒美」ではどちらがいいのでしょうか。

答えは「本を読んだら<sup>ほうび</sup>ご褒美」です。ある実験で、本を読むごとにご褒美をもらった子どもは本を読む習慣が付き、結果的に学力が向上したそうです。一方「いい点をとったら<sup>ほうび</sup>ご褒美」の方は、いい点の取り方が具体化されなかったため効果が減少したそうです。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 2 5

## 「勉強しなさい！」ということばがけの効果

私ごとですが、小さいときよく「勉強しなさい」と親に怒られました。そのことばを聞いては「今からやろうと思っていたのに…」と反抗心が芽生えたものです。

でも「勉強しなさい」って言われなかったら本当にしなかったかもしれません。果たして「勉強しなさい！」という言葉かけは効果的なのでしょうか。

結論を言います。「勉強しなさい」と口で言うだけならばエネルギーの無駄遣いだそうです。（「学力の経済学」中室牧子：DISCOVERより）

親以外

×	「勉強するように言う」
○	「勉強する時間を決めて守らせる」
◎	「勉強を横についてみている」

（祖父母や兄弟）が、働きかけても効果があるそうです。

学校での指導も「○○しなさい！」と口頭での指導が多いのが実情です。しかし、言うだけならマイナス効果。キーワードは「合意作り」と「寄り添う関係」のようです。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 2 6

## ICT教育

便利な時代になりました。インターネット、ライン(LINE)、SNS、iPad……世の中は情報で溢れかえっています。便利な反面、不確かなネット情報が広がったり、過激発言が支持され、無責任な攻撃が繰り返されたり、時代の怖さも感じます。



ICTは（インフォメーション & コミュニケーション テクノロジー）の略語です。中でも、iPadはタッチパネルのアイコンとホームボタン一つという簡素なつくりで、直感的操作がしやすいです。

特別支援教育で使えるアプリも多数あるようですが、多くは

一般向けに作られたものを発想とアイデアで利用します

（引用）：「決定版！特別支援教育のためのタブレット活用」

とのことなので、アプリの「どの部分を有効活用」して、「何を教えるか」を教師は明確に持つておく必要があります。「なんとなく面白そう」では教育効果は半減です。





子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 27

## ユニバーサルデザイン①

ユニバーサルデザインを一言で説明しろ、と言われたら、私は真っ先に頭に浮かぶのがテレビのリモコンです。



<昔のリモコン>



<今のリモコン>

昔のリモコンは多機能が売りでやたらボタンがついていました。はっきり言って使いこなせませんでした。今は右のようなリモコンが増えています。「より多くの人を使いやすい形(デザイン)」という考えが「ユニバーサルデザイン」です。

ユニバーサルデザインに関連した本が多数出版されていますが、ユニバーサルデザインはあくまで教員が伝えたいことをわかりやすく伝える教育の方法です。子どもたちに伝えたい豊かな「教育内容」があってこそはじめて、ユニバーサルデザインが役に立ちます。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 28

## ユニバーサルデザイン②

ユニバーサルデザインの代表的な例について、数回に分けて紹介していきます。

### 場の構造化

- 1.ものの一つ一つに、「しまう場所」があるか
- 2.子どもにも一目でわかる「目印」があるか
- 3.視覚的な「お手本」が用意されているか

<例>



机を置くときの目印



置き場所がわかりやすい  
棚



工具のシルエットと番号が  
書いてある。

体育や集会の整列の時に、ちょっとマーカーを置いておくだけで、だいぶわかりやすくなります。逆にこれがないとことばでの指示が増え、教師も生徒もイライラが増えます。他にも教室で使う文具も直す場所に入れ物やシンボルを示すと、子どもが自分で直せます。



子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 29

## ユニバーサルデザイン③

### 刺激量の調整

1. 注意散漫の原因因子をおさえる配慮があるか
2. 教室前面は、最小限の掲示になっているか
3. 席順や座席の位置は最適か



棚にはカーテンで目隠しをする。これだけで、すっきりとさせることができます。



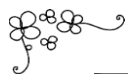
授業のときには、掲示物に目隠しを。



席順をくじ引きや子ども任せにしていませんか。友だちとの距離も刺激量に大きく関係します。

今、教室は、視覚支援で「一日の予定」や各種ルールがいたるところに貼られています。授業に必要なのない時には、昨年度各クラスに配布された、大きく白いマグネットシートで目隠しをすると刺激をぐっと減らすことができます。

過密過大で、教室が多目的になり、収納スペースの確保ができないことも大きな問題ですが、棚もカーテンで遮蔽するなどして、できる支援はしていきたいものです。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

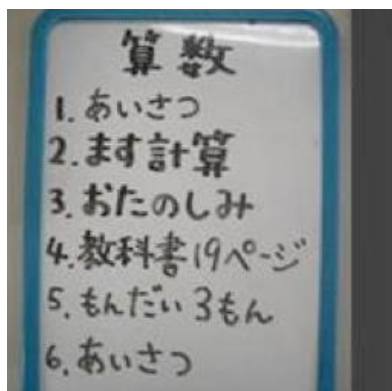
センター室だより

No. 3 0

## ユニバーサルデザイン④

### 時間の構造化

1. 授業全体の見通しをもてる手だてがあるか
2. 時間の区切りが明確であるか
3. 今すべきことが分かる手だてがあるか



授業の最初に、どのような流れで行われるか紹介することで、見通しをもてず不安になってしまう子どもに安心感を与えることができます。



いまから行う活動は何分間で行うのか、終了まであと何分残っているのか、時間の区切りを子どもたちに知らせることも大切です。



指示を口頭だけで行くと、何をしたいのか分からりにくいので、今すべきことを黒板に書いておけば、聞き逃した子どもも活動に参加することができます。

今回紹介している内容は、授業でけっこう多くの方が実践されています。特に授業中のめあてや課題を提示することは準備に一手間かかりますが、「自分が教えたこと」を確認する意味で大切です。

色画用紙にラミネートしたものを用意し何回も書き込めるようにし、教えた内容を毎回書き込んで授業に望んだ先生もいます。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 3 1

## ユニバーサルデザイン⑤

「学校教育のユニバーサルデザイン化」(⇒検索してください) より引用しています。

### 視覚化

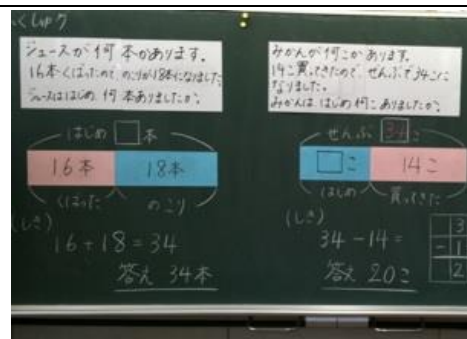
- 1.実物や半具体物の提示で課題を明確にする
- 2.実物などの提示で意欲を引き出す
- 3.図や表などにまとめ、直感的理解につなげる



実物を見ることで、イメージをつかみにくい子どもや理解がゆっくりな子どもでも、視覚的に理解を深めることができます。ICT 機器の有効活用も効果的です。



実際にやってみる、実物で体験することは、子どもたちにとって魅力的で、意欲をもって取り組むことができます。



図をつかって直感的に量感がつかめるような配慮を行うことで、言葉だけでは理解できない子どもにとっても分かりやすい授業になります。

これこそ支援学校の醍醐味と私は思います(例示が一般校のものですみません！)。具体物を使った実際の活動。視覚的にもわかりやすいし、具体的操作がもたらす教育的効果は計り知れません。

「手ごたえ」と「達成感」。ただのプリント学習では引き出せない子どもたちの「わかった!」「できた!」を下支えする教育効果です。





子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

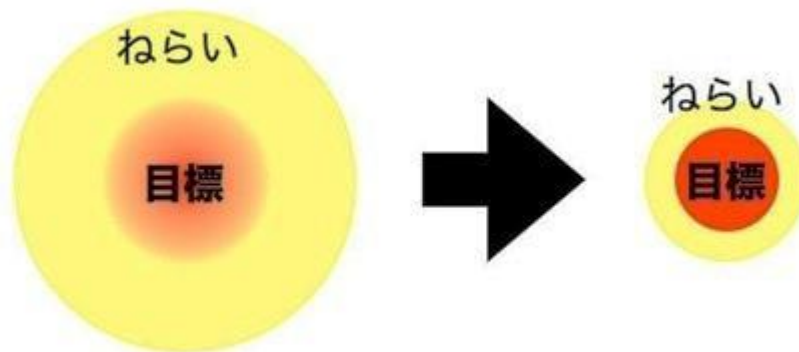
センター室だより

No. 3 2

## ユニバーサルデザイン⑥

### 焦点化

- 1.1時間の授業の「ねらい」を絞る
- 2.授業の山場を設定する
- 3.活動を「ねらい」に直結させる



「なぜ、この教材を選んだか」「その教材で子どもたちにどんな力をつけたいのか」、この2点は授業を創る上でかせませません。

ねらいが漠然としていると、授業の展開や発問で失敗しがちです。これは「何を教えたいか」教師が明確なビジョンを持っていない、ということなのです。

焦点化（何を教えたいかを教師が明確に）することで教材の提示、発問、働きかけすべてがわかりやすくなります。

「焦点化」こそ究極のユニバーサルデザインと私は思います。



子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

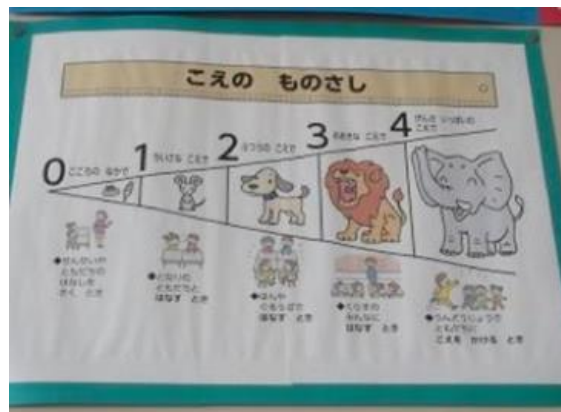
センター室だより

No. 3 3

## ユニバーサルデザイン⑦

### ルールの明確化

- 1.全員が実行可能なルールか
- 2.視覚的に分かりやすく掲示してあるか
- 3.できた、できなかったの評価が明確か



「ルールの明確化」を紹介すべきか、実はためらいがありました。

今、一般校では「〇〇スタンダード」という形で共通ルールを全校的に取り入れる風潮が広がっています。子どもにわかりやすいという目的のスタンダードはOKですが、ややもすれば「管理をしやすくするため」という場合も多いし、そもそも、「なぜそのルールなのか」という大前提を教師が考えなくなっているからです。

あくまで子どものわかりやすさの追求という大前提を忘れずに！



子どもたちはもっと輝く！



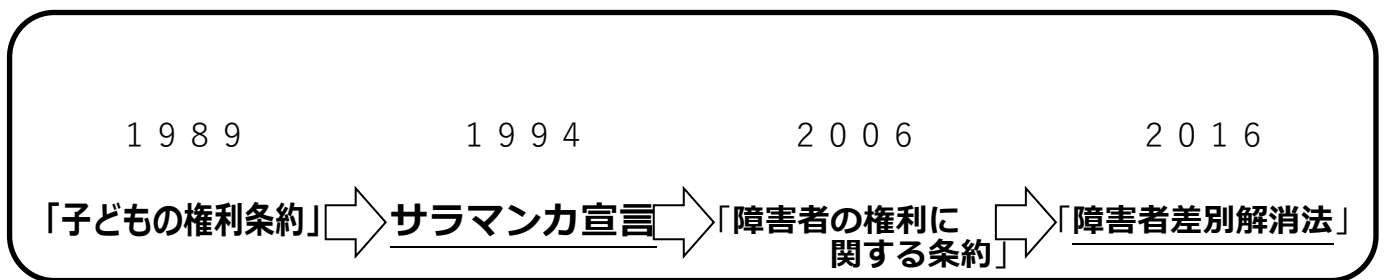
大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 3 4

## 「合理的配慮」

「ユニバーサルデザイン」と同様によく耳にするのが「合理的配慮」ですが、このことばが出てくるまでに長い歴史がありました。



(国連総会)

(ユネスコ本会議)

(国連総会)

日本で施行

昔は「一般校では教育できない」と頭ごなしに断られてきた子どもたちも「インクルーシブ教育」「合理的配慮」という2つのことばで「可能な限り共生教育を推進」する仕組みができています。ただしこの法律「過度の負担を課さないもの」という条件つきで、どこまでが過度なのか、正直、怪しいものです。



支援学校で言う「合理的配慮」とはなんでしょう。

一人ひとりに行っている「支援の手だて」がそれにあたります。

「合理的・・・」ですので、本人の自立や学習を妨げない、適切な範



囲での支援の手だてが求められます。

大阪府立佐野支援学校

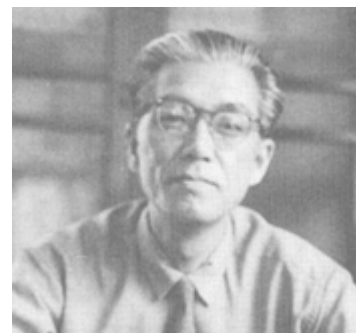
センター室だより

No. 3 5

子どもたちはもっと輝く！

## 「この子らを世の光に」

『障害者』も『健常者』も、ともに生きていける社会こそが豊かな社会だという信念のもと、「近江学園」を創設し、「重度障害児」と向き合い、強い意志を持って実践し続けた障害者福祉の父、糸賀一雄の有名な言葉です。



糸賀一雄の活躍した時代はいまだ「障害者」に対する多くの偏見を色濃く残した社会でした。



この子らが「世の光」として輝けるような社会＝その輝きを認めあえるような社会こそが豊かな社会であるという「社会の創造・変革」をも含み込んだ理念なのです。(引用)

2016年「津久井やまゆり園」で起きた凄惨な事件。意外なこと

もツイッターではそれに共感するツイートもあるようで、障がいのある人とどう向き合うのか、理想と現実との間には、まだ、大きなギャップがあるようです。

教育現場では、専門性の向上とか指導のあり方がクローズアップされています。しかし、一番大切なことは「この子らを世の光に」という考え方を人権教育のはじめの一步とし、みんながそのような

気持ちで子どもに向き合えることだと私は思うのです。

 <p>子どもたちはもっと輝く！</p> 	大阪府立佐野支援学校 センター室だより <u>No. 3 6</u>
--	--

## 「養護学校不要論」

「この子らを世の光に」で始まった近代の障害児教育ですが、やっと1979年（昭和54年）義務教育として法制度上に明確に位置づけられました。それまでは「就学猶予」という形で義務教育が保障されず、社会参加できなかつたのです。



私が初任で勤めだしたころ、当時教育を受けられなかつた人たちが「学びなおし」で、当時の私より年上の人も若い生徒に混じって学校に集っていました。このように障害児も健常児と同じように生活する権利を求める運動が当時は盛んでした。そのような運動を「ノーマライゼーション」と呼んでいます。

ところが、この過程で「平等」を求めるあまり、教育目標、内容、方法が度外視され、「健常児と同じ場所にいることこそ平等」という立場で「養護学校不要論」が出てきました。学習内容がわからなくても、一緒に居ることの方が大事にされたのです。

私の知る限りでは、昔、大阪の北部地域で「養護学校不要論」が根強く、今でも一般小学校で「支援学級籍」で認定されているにもかかわらず、「支援学級」は作らず、「通常学級」の中で指導が続けられていることもあるようです。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 3 7

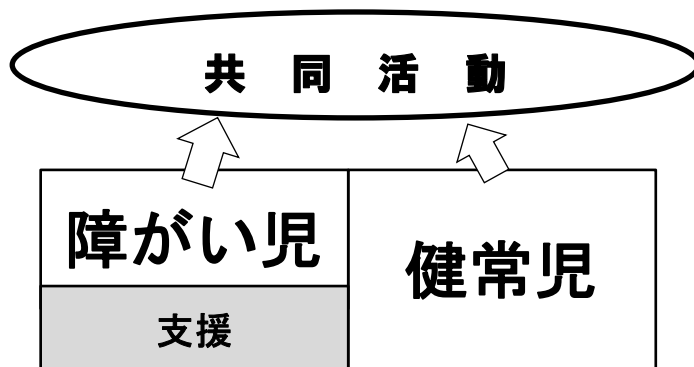
## 「インテグレーション」(統合教育)

「ノーマライゼーション」で障がい児も健常児と同じように生活する権利が追求されていき、具体的な共同活動のあり方が検討されるようになりました。

基本的には、障がいのある人に適切な支援をすることで、健常者とのハンディをなくし、共同活動を模索していきます。

このような取り組みを

「インテグレーション」(統合教育)と呼んでいます。

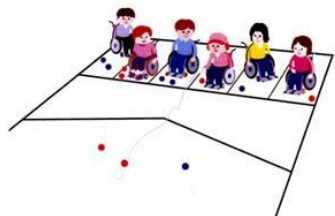


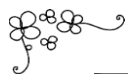
ちょうどこの時期、冬の「長野パラリンピック」があり、日本選手が活躍しました。その時の選手のことばが象徴的でした。

「ぜひ、健常者の方とチェアスキーを競ってみたい」

この時期には「早稲ハスケット」や「早稲メックス」なども話題

を呼び、障がい者と健常者がどうすればともに楽しめるか、多くの人たちが知恵をしばってました。





# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 3 8

共同活動

障がい児

支援

健常児

## 「インクルージョン（包括教育）」

「インテグレーション(統合教育)」は、基本的に障がい者と健常者を区別していません。

ところが日常生活で困っているのは「障がい者」だけではありません。例えば「帰国子女」ことばの壁にぶつかっています。「不登校」の子どもたちには、ゆるやかに参加できる環境が必要です。家庭環境が悪いため「育ちそびれ」ている子どもたちもいます。



不登校

じめなど心のケア



校・い

帰国子女など、ことばのハンディ



家庭環境などによる育ちそびれ

1994年ユネスコの会議で「万人のための教育の目標実現に向け、特別なニーズもつ子どもたちへの対応」が検討され、「インクルージョン」の考えが宣言されました。これを教育現場で実践しようというのが「インクルーシブ教育」です。理念としてはすごくいい！

ですが・・・

- 共生社会の形成には、施設設備の充実や人材確保がかかせませんが、当時は予算の拡充はなく、現場の負担は大きくなりました。
- 「個に応じた支援」の検討が難しく、「支援学級」対応にすることで、問題解決をはかるケースが増えました。（支援学級・支援学校の生徒数が増加傾向になりました）

子どもたちはもっと輝く！

大阪府立佐野文援子校

センター室だより

No. 39

「朝日新聞」記事  
(2017.04/30)  
より引用です

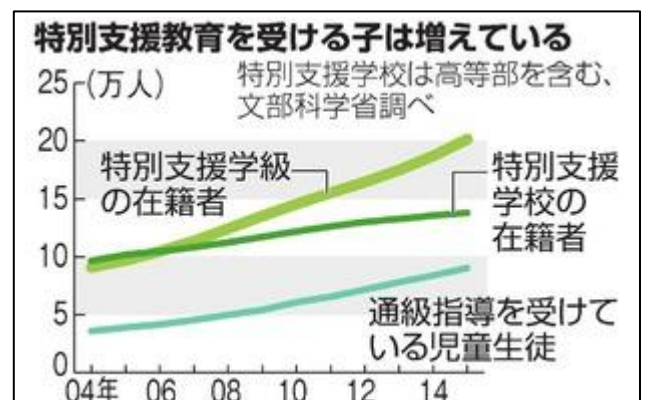
## 特別支援教育 10 年を迎え..

「特別支援学校」で深刻な教室不足が続き、2016年10月現在、3430教室が足りないことが文部科学省の調べでわかりました。特別支援学校の在籍者が近年急増し、教室数が追いついていないそうです。



特に知的障害のある子が増え、全体の9割を占めています。また、比較的障害が軽い子が通う小中学校の特別支援学級の在籍者も10年で約2倍になりました。

背景には、障害の診断が普及したことがあるようです。障害があると診断されると、支援が得やすい教育を望む保護者が増えたとみられ、「特別支援教育への理解が深まった」との見方があります。

一方、支援が必要な子に対応できていない小中学校の課題を指摘する声もあります。通常の学級を希望した知的障害児や発達障害児



の保護者が、教育委員会や学校から「(通常学級では) いじめられるかもしれない」「高学年になると勉強が難しくなる」などとして特別支援教育を提案されるケースもあるそうです。

 <p>子どもたちはもっと輝く!</p> 	大阪府立佐野支援学校 センター室だより <u>No.40</u>
--	--

## 水泳の指導について

楽しい楽しいプールの季節がやってきました。日ごろけっこう何でも自分でやっている子が顔つけができず固まっていたかと思えば、普段ゆったり過ごしている子が「水を得たサカナ」のようにもぐりまくったりしています。

ところで、こういうプール大好きの子どもをよく観察しているとある特徴があります。それは水中で必ず力を抜き、リラックスしているということです。人間の体はしっかり息を吸い込めば浮くようにできています(筋肉モリモリの方は例外ですが……)。

プールは全職員が指導にあたりますので、上記のことは知っておいて欲しいです。バタ足で水しぶきを高く上げるのがよい指導ではありません。力が入れれば入るほど体は沈むのです。「水とけんかするのではなく、水と仲良くなる」のがコツ。だから、け伸びで楽に浮いている子の手を優しく引っ張って「浮いてい





る感覚」や「進む感覚」を味わうのが一つの指導方法と思います。

大阪府立佐野支援学校

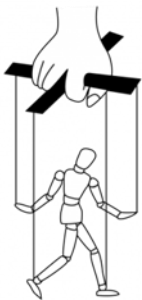
センター室だより

No. 4 1

## 生徒も教師も主役の運動会を創ろう！

夏休みも終わり2学期が始まりました。まずは運動会です。早速のテント設営お疲れ様です。今年は特に全校一斉スタイルの復活で、企画する先生たちは本当に大変と思います。ごくろうさまです。私たちは資料にしっかり目を通して、協力して運動会を創っていきたいものです。指導の主役は先生たち全員です。

**Who will control?**



そして、演技の主役は子どもたちです。重度の生徒の指導に対し、動きを引き出そうとするあまり、つい教員が手取り足取り動かしがちになります。逆に、「〇〇さんのこの動き、何とか演技に生かせないか」と、

子どもの動きに意味を見つけないものは、きらりと光る子どもの個性的な動きを、保護者や先生同士で共有する。

これこそ障がい児教育の醍醐味です。

生徒一人ひとりに意味ある身体表現があると思います。その動きが当日発表できたかどうか、それを保護者と共感できたら、その子にとって運動会は大成功ではないでしょうか。





# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 4 2

## 学校行事のもつ教育力

「働き方改革」のもと、学校行事の見直しや精選が精力的に取り組みられています。「例年通り……」の取り組みで、ねらいや内容が吟味されにくくなっている中、必要なことだとは思いますが。

ただ、どのような視点で見直すかは重要な観点です。「教員にとって負担が大きいか大きくないか」ということも大事ですが、「子どもにとってこの行事はどういう意味があるのか」という視点も大事にしたいものです。

行事には二つの大きな力があると思います。それは、



- ① 普段、子どもたちが学校生活では経験できないことを味わえる。
- ② 日常と違う経験が子どもたちの内なるエネルギーを高め、「新たな課題」に挑戦する意欲を高めたり、経験したことを継続しようとする態度を育てたりする。

を行った制野俊弘先生は、「行事という『祭り』にも似た非日常的空间だからこそ、新たな自分に気づき、力を発揮することができる。

そして、その力は日常生活にフィードバックされ、新たなエネルギーとなり、日常生活を変える主体者を形成する」と述べていました。





子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 4 3

## 「子ども集団」が持つ 教育の力

「家庭」と「学校」の大きな違い。その一つは、子どもたちが集団で学んでいるところです。

「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」etc. 子どもたちの実態は一人ひとり違うから、当然、個にあった課題設定は必要です。しかしそれは「個別指導の計画」ではありません。

集団の中で子どもたちが見たり、聞いたり、感じたりすることの一つひとつに子どもたちが成長する糧がぎっしり詰まっています。そういう点で子どもたちの学習集団やクラス集団をうまくまとめ、「ともに学ぶ」ための条件を作るだけで子どもたちは自動的に多くのことを学びます。「教師の仕事は環境を整えること」なのです。

Tくんは自分の思い通りにならないときは固まる、隠れるなどを繰り返し、なかなか集団に入ることができませんでした。

でもある時、運動会でかっこよく踊るSくんに憧れ、並んで踊るようになりました。それからです。TくんはSくんの姿を追い求め、自分の行動を自分でコントロールするようになりました。たとえば、いったんブランコに乗るとなかなか降りることができなかったTくん、Sくんと一緒に帰りたい気持ちが、ブランコにずっと乗りたい気持ちを押しさえつけ、自分からブランコを降りて帰るようになりました。

友だちからもらうエネルギーはすばらしい。だから「学校は子どもたちが大きく変わる中心地なのだ」と私は思います。



# 子どもたちはもっと輝く！



大阪府立佐野支援学校

センター室だより

No. 4 4

## 「ゼロ・トレランス」の指導

「ゼロ・トレランス」とは 1990 年代にアメリカで始まった教育方針の一つで、「寛容・ゼロ」の文字通り、どんな理由があろうとも、規則に反することをしたときは、罰則を定め厳密に処分を行う方式です。「トイレのガラスが一枚割れて、それを放置していたら学校全体が荒れてくる」というように風紀の乱れを早いうちに正すことを大切にしています。



ですがこの「ゼロ・トレランス」の指導、積極的に進める地域もあれば、異論を唱える人も少なくありません。

例えば、遅刻をしてきた生徒。生活が不規則で、朝、起きられなかった人と、登校の途中で人助けをして、結果的に遅れてしまった



人とが同等に罰則を受けていいのでしょうか。また、支援学校でいうなら、生活が不規則と言うのは、その人の自己責任ではなく、支援の対象ではないのでしょうか。

「ゼロ・トレランス」の指導のメリットとして統一的な指導が可能になることを挙げている人もいます。でもそれは、個々の事情を考えることを放棄した教師の弱点とも言えます。

社会参加実現のためにルールも教えなければいけません、どうやってそれに近づくか、道のりを示すことが一番大事なのです。